

研究授業「保育職基礎演習」の実施報告

出木浦 孝*

Report on an Open Class :

Takashi Dekiura

要約

本稿は、平成23年度第1回保育学科研究授業（「保育職基礎演習Ⅰ」）の実施報告である。保育職基礎演習は平成23年度入学生より開講された科目で、保育学科全教員が担当し、その専門領域に基づくオムニバス形式で進められる。

キーワード：音、環境

(Abstract)

This paper report on an open class held at the Department of Early Childhood Education during the first term in 2011 including records comments given by department members at the meeting after the class.

The lesson focused on the problem of the sound environment surrounding children, and the awareness of the sounds surrounding us.

Key words : sound, environment

1. 研究授業実施の日程

(1) 研究授業

日時：平成23年6月4日（火）3校時

教室：2101講義室

科目：保育職基礎演習Ⅰ（講義）

* 2011年11月30日、保育学科

対象：保育学科1年生（86名）

担当：出木浦 孝

参観教員数：保育学科教員7名

（2）検討会

日時：平成23年6月4日（火）5校時

教室：2201演習室

参加者数：保育学科教員8名

2. 保育職基礎演習Ⅰの授業計画

本科目は、子どもたちや保護者から信頼される保育者になるために、「保育者（先生）として絶対に求められるもの」について考え・体得する科目としての位置づけである。

第1回 オリエンテーション - 保育者になるためのラーニング・ティップス -

第2回 信頼される保育者に不可欠な立ち居振る舞いを実践する

第3回 保育者を目指す自分を振り返り、これからの課題を立てる

第4回 私たちが目指す保育界の現状に目を向ける

第5回 園を調べ、園マップを作成する

第6回 保育技術を磨く保育実践活動を計画する

第7回 園で積極的に取り組まれている実践例を分析する①児童文化総論

第8回 子どもたちのために知っておいて欲しいこと - 音環境の問題について -

本時の授業

第9回 保育現場を学ぶ手段としての保育ボランティアを理解する

第10回 保育現場で活躍する卒業生との交流①

第11回 保育現場で活躍する卒業生との交流②

第12回 保育技術を磨く野外実践活動を計画する

第13回 園で積極的に取り組まれている実践例を分析する②絵本・紙芝居の読み聞かせ

第14回 保育所・幼稚園での振る舞い・生活技能を確認する

第15回 まとめ

3. 本時の概要

前述のように、本科目はオムニバス形式であるため、前後関係というものが基本的に存在せず、一講義完結の形態である。

3-1. 授業者の意図

本時は、「子どもたちのために知っておいて欲しいこと -音環境の問題について-」と題し、存在してあたりまえの音に関して、その特徴や環境に関して学生に問題意識をもたせることを目的とする。

歩きながら、あるいは電車やバスのなかで、さらには友人との会話中すら携帯音楽プレーヤーをイヤホンで聴いている学生の姿を多く見かけるようになった。このような行為が耳をどれほど蝕み、難聴の危険性を高めていることを学生が理解していないことに危機感を覚えた。

以前と比較すると、昨今はわれわれを取り巻く音の種類がはるかに増加したのみならず、音量も大きくなっている。そのような状況のなかでそれをはるかに超える音量で音楽を聴く行為が日常化することは、小さく細やかな音に対する知覚度が減少する恐れが高く、子どもたちが劣悪な音環境にさらされても気づかない保育者が増加する危惧がある。さらには、子どもたちの声を聞き分ける能力さえ奪われてしまう可能性さえある。

このようなことを踏まえ、本授業では保育者自身が「聴く」行為の重要性を認識し、さらには子どもたちにとっての音環境に対する問題意識を提示し、それに基づく環境構成の一助とすることを目的としている。

3-2. 授業内容

①問題意識の自覚

存在してあたりまえと思われている音に対する疑問を提示する。聴く意志がなくとも音楽が周囲に満ちあふれている現状において、音楽以外の音を自らの意志で聴こうと努めることはほとんどない。音は「背景」であって「前景」ではない。今日では、このような音が、最悪の場合には健康を損ねることさえあることを説明し、学生に問題意識を起こさせた。「音とは何か?」という根本的な問いかけから授業が開始された。

②聴覚的資料の積極的な使用

音に集中させ、「耳の感度を上げる」ために、学生には視覚的資料は極力使用せず、聴覚的資料（すなわち実際の「音」）を用いた。主な資料および資料を用いた実験内容は次の通りである。

実験1：可聴領域のテスト

・サイン波

学生の耳が知覚可能な周波数を測定するために、ラップトップ・コンピュータ上に音響プログラミング・ソフトMax/MSPを立ち上げ、モニター・スピーカー（20Hz～30,000Hzの周波数特性を有する）から人間の可聴周波数帯域といわれている20Hz～20,000Hzまでのサイン波を放出して測定した。

実験2：聞き過ごしている音の発見（資料は用いなかった）

学生たちに対し、可能な限り音を出さないように立ち上がらせ、10秒間静止し、座らせ、その間に聞こえた音すべてを記入させた。これは、多様な音が鳴っているにもかかわらず、それらを聞き過ごしていることがいかに多いかを学生に自覚させるためである。

実験3：音で音を消す（ノイズキャンセリング）

・ノイズキャンセリングを紹介するための音声ファイル

電車のなかでイヤホンを装着して英会話を学習する場面を想定し、電車のなかで収録した音声ファイル、同ファイルの位相を反転したファイル、そして英会話のファイルを準備し、ノイズキャンセリングの実験を行った。これは、ノイズキャンセリングを紹介するためではなく、このような技術を開発しなければならないほどに音環境が深刻化していることを学生に自覚させるためである。

また、補足として子どもの歌のオーディオ・ファイルアコースティック楽器のみによる子どもの歌（「ちいさい秋みつけた」）の音声ファイル、および（歌のパートをのぞく）すべてのパートを電子的に合成された音のみでアレンジした同曲（アレンジは筆者による）の音声ファイルを用意し、その響きの相違を理解させた。

3-3. 指導上の留意点

まず、昼食後の時間帯であり、睡魔に負けてしまう学生の存在も想定されたため、テン

ボ感のある授業を心がけた。

学生に配布した学習シートに質問は記載せず（授業の展開をあらかじめわからせないための措置である）、その都度授業者が口頭もしくは板書にて伝達した。また回答時間に制限を設け（30秒など）、時間内に記述が完了するよう努めた。

これまでの当該授業では使用していない機器を持ち込むことで、学生の注意がそれないよう努めた。

4. 学生の状況

本授業は保育学科1年生全員の授業であり、人数が比較的多いため、私語等の懸念もあったが、毎回保育学科教員全員が参観していることも手伝って、比較的静かに受講している。ただし昼休み直後の授業ということもあり、やはり居眠りをする学生が若干見受けられる。また、静かに受講してはいるが、あまり関心がないように見える学生も若干いるようである。

本時は、可能な限り学生の集中を持続させるべく、あえて学習シートに質問事項を書き込まなかったり、シートの記入時間に制限を設けたり、沈黙の時間を少なくするよう努めた。しかしながら、学生の身体的な動作をほとんど伴わない「聞く」という行為だけでは、やはり一定時間の集中を持続させるにはじゅうぶんとはいえなかった。

5. 授業に対する参観者の評価

本授業は、保育学科教員7名の参観のもとに実施された。各教員の参観記録によると、授業者の意図したところがほぼ肯定的に受け止められていたと考える。

改善に関わる点としてあげられていたことは以下のように要約することができる。

- ・本授業で「最低これだけは理解してほしい」部分をもう少し強調すればよいのではなか。
- ・時間配分、最後のまとめにもう一工夫ほしい。
- ・授業者の主張の根拠となるところをもう少し具体的に説明するとよい。
- ・オムニバス形式の授業であるため、他の教員の授業との関連・連携も考えるべきであ

る。

- ・最終的判断を学生に委ねるのではなく、授業者の判断を明確に主張すべきである。

まとめ 一授業改善の課題一

筆者は音楽担当であり、通常は少人数クラスの実技という授業形態のため、86名という人数および講義形式の授業をおこなうことに対しては、少なからず不安があったことは率直に認めなければならない。音楽に関して授業者が語るという形態は、ともすれば観念的、あるいは哲学的傾向を帯びる。現場で求められるのはまず演奏技能であり、観念的な事柄を前面に押し出すことはできない。

音楽の授業をするということは、まず楽器に触れて音を出したり、歌をうたったりという身体的運動性を伴うものでなければならない。そこにこそ現場で求められる「表現」が生じると考える。したがって、本授業では、「音楽」という考え方の大部分を放棄せざるを得ず、「音」をある程度科学的観点から説明することが求められた。

しかし、「音」を環境と連携させれば、講義としての授業も成立できることを実感した。筆者にとってこのような授業は初めての試みであり、手探りの部分も存在したが、このような授業形態で「音」をより「音楽」的領域に近づけるための方策の開拓が今後のもっとも大きな課題となった。

保育職基礎演習Ⅰ第9講 指導案

子どもたちのために知っておいてほしいこと ～音環境の問題について～

授業者：出木浦 孝

・日時：平成23年6月7日（火）3校時

・本時のねらい

- ・あまりにも多くの音が氾濫する時代にあって、子どもを取り巻く音に対して問題提起する。
- ・音のもつ特性を理解するとともに、「聴く」行為を意識させる。
- ・音が健康にもたらす影響を理解する。

	活動内容	留意点	
~13:00		・ 座席表の提示、確認	
13:00	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「あってあたりまえ」の音の安全性に関する疑問を提示し、問題意識をもつ。 ○ われわれを取り巻く音の現状の理解 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 耳に意識を向ける必要性から視覚的な資料は可能な限り用いないことの伝達。 ・ 問いかける形態で進める。 ・ 音は感覚的なものであるため、授業者の見解を押しつけることは可能な限り避ける。 ・ 音楽に関する話題も適宜織り交ぜる。 <p style="text-align: center;">進行状況に応じて内容の一部を省略する可能性あり。</p>	
13:15	<ul style="list-style-type: none"> ○ 実験1（可聴領域のテスト） <ul style="list-style-type: none"> ・ 聞こえた音のおおよその高さを記入する。（音の高さに対する耳の感度の理解）。 ・ 耳に聞こえない音が健康に及ぼす影響の理解 ・ 耳に聞こえない音が音楽以外で用いられる例の紹介 ・ CDや圧縮音源の問題点の理解。 ○ 実験2（聞き過ごしている音の発見） <ul style="list-style-type: none"> ・ 可能な限り音を立てずに立ち上がり、座る。その間に聞こえた音を記入する（音の種類に対する耳の感度の理解）。 ○ 実験3（音で音を消す） <ul style="list-style-type: none"> ・ 音環境に対する最近の技術的取り組みの一例の紹介およびその背景、健康への影響を理解 		
14:10	<ul style="list-style-type: none"> ○ 今日の音（もしくは音楽）受容形態の問題点 <ul style="list-style-type: none"> ・ CD等で用いられている生楽器とパーチャル楽器との相違、およびそれらの選択に伴う危険性について理解。 ○ 学習シートの回収。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 話題が抽象的になりすぎないように注意する。

保育職基礎演習 I -⑨ 学習シート

学籍番号 () 氏 名 ()

所属研究室 () 評 価

課 題：次の各項目について、指示に従い、すべて記入しなさい。

Question 1：

Question 2：

Question 3：

Question 4

Question 5：

Question 6 :

--

Question 7 :

MEMO

研 究 紀 要

第56・57合併号

平成24年 2月25日 印刷

平成24年 2月28日 発行

編集発行 高 松 大 学
高 松 短 期 大 学
〒761-0194 高松市春日町960番地
TEL (087) 841-3255
FAX (087) 841-3064

印 刷 株式会社 美巧社
高松市多賀町1-8-10
TEL (087) 833-5811